

## 5. 被害者支援への要望・社会への発信

最後にインタビュー協力者の方々に、「被害者のための支援について、日頃お感じになっていること／こうなってほしいという要望などがありましたらお聞かせください」と尋ねました。以下のように、多くの意見を寄せていただきました。

### 【自治体の被害者支援の充実を目指したい】

この方は、全国的な当事者団体で被害者の権利獲得に向けて活動してきましたが、現在は自治体の支援を充実させるための活動に幅を広げています。その思いと社会の理解について、つぎのように語っています。

「〇〇の会（犯罪被害者遺族の会）の活動って、国に対していろいろ制度設計を要求するとか、そういうことで、自分自身としては、国にこれだけ働きかけて、…いろんな成果を挙げてきたっていうので、すごく満足してたんですよ。そのうちに他の団体の人だとかいろんな人と会うようになって、〇〇（犯罪被害者団体ネットワーク）の大会にも誘われて行って見て。そこで、地方自治体による被害者支援っていう言葉を初めて知ったんです。そう考えれば、うちなんか、（地元の）〇〇市から何の支援も受けてないし、受けられるものだとも全く思ってたっていうことで、…（現在ある）〇〇市の犯罪被害者相談室の人とも会っていろいろ話して、そうなんだ、じゃあ、うちなんかでもそういうのがあれば、もしかしたら妻（被害者の母親）も死ななくても済んだのかなとかって思っていて、…じゃあ、「〇〇条例研究会」を立ち上げて、条例制定に向けていろいろ訴えていこうっていうことで、…その活動も始まったと。」

「被害者に対する理解っていうのはやっぱりまだまだ進んでないっていうのはありますね。それはしょうがないですよ。自分自身も、自分が被害者になるまでは殺人事件のニュースなんかをテレビだとか新聞で見聞きしても、あ、これはよその出来事だと。うちみたいな平凡な家には起こりっこないんだっていうふうに、何の疑いもなく、ただ思っていましたから。それは、一般の人は、そう思うのは仕方がないのかなと思うんですけど。自分がこういう立場になってみると、勝手な言い方ですけど、もっと分かってよって言いたくなるんですよ。」(P1)

### 【具体的な提案：生活支援、役所等の手続き支援、必要な情報提供】

✓ 生活支援や故人の死後手続きを手伝ってほしい

「本当に（事件）翌日から子どもたちのご飯を作らなきゃいけない。…家の中のことをしなきゃいけない、あと、一番分からなかったのは、手続きです。夫が亡くなったから年金の手続きだ、それから預金口座の手続きだ、相続の手続きだ、もう、一家の大黒柱が亡くなるとやるべきことが山ほどです。何をしなきゃいけないか、それにはどこから、どうやって手を付けていったらいいかっていうのを、一緒にやってくれる人がいたらどんなにありがたかったらと思う。」(P2)

「いろいろあったんですけども、やっぱりこう役所の手続きに行かなきゃいけないとか、それに付き添うとか。例えば銀行の解約とかそういうのが発生したときに、そんな元気もないしとか、っていうときに一緒に行ってあげたりとか。というもう本当に生活の細かいところが本当に大変。私（の事件の被害者）は主人だったので、なおさらもう何だろう、いろんな手続き上やらなきゃいけないことがたくさんあって。もうそんなの全部一人でやってたので、そういうの

が大変だったとか。そういったところと一緒に伴走してくれるような何か、ないのかなみたいな。何か窓口とかもあっち行ったりこっち行ったりとかしなきゃいけないし。」(P4)

✓ 子どもを預かってくれるところの情報や、被害者支援に詳しい精神科医の情報がほしい

「今思えば、.. そういうときにこそ何かちょっと支援の手が届いてくれれば。子どもを預かってくれる所をまず探すのが大変だったので。あとはやっぱり、12月ぐらいに初めて精神科の先生に巡り会ったんだけど、そもそもどういう先生がどこにいるのかとかも分かんないし、どんな先生がいいのかも分かんないし。たまたま「この先生、被害者支援やっている先生、いいから行ってみな」って紹介されたから、やっとその先生につながったんですけど。だから、それまで怖くてどこにも行けなかったですよ。眠れないとか、心療内科とか行って何かお薬もらってあげればいいのかなんて思っても、何か気軽に行けなかった。事件のこと話さなきゃいけないのかなとか、そういうのもあって。そういう心理的なサポートしてくれるって、どういう所がいいんだろうっていうことすらも分からないので。そういうのが何か、この先生がいいから行ってみたらどうですかとかっていう(情報)があればよかったかな。」(P4)

【支援機関の連携がもっとスムーズにとれるとよい】

✓ 困ったときの対応窓口があり、関係機関が連携して支援がつながるとよい

「こんな被害者支援があったらいいな。今、(地元)でも(被害者支援)条例を制定しようという動きがあって。自助グループからも知事に「制定してください」って嘆願書とか送ったりしたんですけども。すごく感じるのは、支援センターとか例えば福祉とか、お役所とか自治体とかですね。そういうところの横のつながり、連携がもっとスムーズに取れないのかなっていうのをすごく感じて。何ていうんですかね、途切れない支援って一体どういう支援ってなると、やっぱり困ったときにここに行けばちゃんと窓口があるんですよ。で、そこからいろんなところにつながっていきますよっていうような、横の連携につながって.. いければ助かるのになって本当に思います。」(P4)

✓ 自治体窓口、センター、自助グループの連携が必要

「.. 刑事裁判が終わったらもう(センターは)支援継続するのは難しいとか。でも、遺族にとっては気持ちが回復するのはそんな簡単なことじゃない、何年もかかるので。何年も付き合っていられないわけですよ、センターは。だからそういうところを自助グループでフォローしていくとか、何かそういうふうにもいろいろと横の連携が取れたら一番いいなというのがあって。あとはやっぱりこう、今後県で条例できた後に市町村の窓口の、どうするんですかっていう話とか。やっぱりお役所は異動があるので、そういうときに本当にこう被害者支援対策窓口をつくったとして、その人材どうするんですかとか。窓口が異動になって代わったときに、また一から育てるんですかとか。いろんなことが起こると思うんですよ。そういうときに自治体窓口の人たちとの連携とか、(中略)..そういうのは何か横の連携がつけられる体制をちょっと(地元)でも構築していきたい..」(P4)

✓ センターと自助グループが協力し合っていくことが必要

「.. あとはやっぱり(地元の)センターを見て思うのは、せっかく志して研修まで受けてボランティアになったのに、思うのと違っていて長続きしないボランティアがたくさんいるんですよ。それを見ていると、もうちょっと支援の在り方っていうのも考えていかないと。せっかくボランティアさんが来てくれているのに、育つ前にやめちゃってもどうなんだろうとか。なので、今年に入ってちょっとコロナの合間を見て、落ち着いた時期があった時にセンターのほうに連絡をして、今までそれぞればらばらに活動してきたけど、□□の会(自助グループ)と(地元)センターで協力

してやっていきませんかという話をしたんですよ、センターの方に。その場をつくってもらったんですね、その場をつくってもらって。一緒に取り組みませんかという、もう「ぜひ、ぜひ」っていうことだったんですけど。で、コロナがまた(状況が悪くなってきたので)…センターももう活動できなくなっちゃったので…(コロナの状況を見ながら続けたい)」(P4)

#### 【支援の基本:気にかけてくれる人がいる、受け止めや回復のペースはみな違う】

被害者支援の基本として、つぎのような声がありました。被害者としての実感が示されています。

「(被害者支援全般について) サポート、カウンセリングとかはいいだろうなと思います。やっぱり話を聞ける。でも、カウンセリングほど構造化されていなくても、何か話を聞いてくれる人がいるっていうことが一番なのではというふうに思います。病院とかで待ってる時とかも、看護師さんが「心配しないでいいよ」って何回も言いに来てくれたりとか、そういう何でもないことが記憶にすごく残ってるので。そういうのは制度化するのって難しいと思うんですけども、気にかけてくれる人がいるよっていうのはやっぱり必要だろうなって思います。多分、いろんな人が言ってると思いますけれども。」(P5)

「…あとは、被害にあった家族の中ではこう、一応、皆さん受け止め方が違うので。親の立場、母親なのか父親なのか、子どもなのか、お兄さんだったのかお姉さんだったのかとか。それによっても受け止め方も違うし、この回復の速度も違うし。だからそれぞれでいいんだよっていう。いいんだよ、自分のペースでって。誰も責めない。だから、必ず前を向いて生きようになるからってずっと言い続けることが大切かな。(自分が)支援していく中で思いますね。(中略)…その人のペースで回復していくのを待ってあげる。で、応援してあげるっていうのも必要かなと。長い意味で、ですね。」(P4)

#### 【被害者側の弁護士の意識を高めたい】

この方は、裁判で苦勞した経験から年に1回司法修習生相手に講演しており、被害者側の弁護士としての認識や知識が広まることを要望しています。

「今、司法修習生相手に話をするっていうのが、経験を話すっていうのが、依頼が年1回来るんで、そこでちょっと話をします。…基本的には、そうですね。裁判員裁判になって「こんなことがあった」っていうところと、あと弁護士に対して「こんな不満があった」ってというのが中心です。何だろう。いや、何かそこまで、まだ被害者側の弁護士っていうのは浸透(していない)…仕事として認識、ちょっとずつ広まっただけやと思うので、そもそもどういうことを元々するのかとか、そんなレベルから、ちょっと知識が持ってもらえたらなっていう気持ちです。」(P3)

#### 【SNSを通じた被害者に対する誹謗中傷についての対策が必要】

最近の問題として、被害者に対するSNSによる誹謗中傷があります。この方は自分で自助グループをつくり運営している経験から、誹謗中傷で悩む被害者が増えていることを実感しており、その問題点をつぎのように語っています。SNSを通じた誹謗中傷は容易にでき、被害者をさらに苦しめ二次被害につながる問題であり、早急の対策が求められます。

「これは、ここ十数年の（傾向で）… 遺族の方に会ったときに毎回思うことなんですけども、もう SNS とかネット上の被害っていうのがすごくて。いわれのないことを書かれたりとか、そういうのがもうどうにかできないのかなっていう…。被害者は名前が出ちゃうので。何で被害者だけ名前出るのとか、… みんな思っていることなんですけども。インターネット、SNS 対策ってどうにかできないものなのかなっていうのは、すごく思います。より遺族の方を傷つけるので。国全体として何か対策してもらえたら（いい）。お会いすると、もう必ずみんなそう言うので。「ツイッターにこんなこと書かれた」とか。「うーん、そっか」みたいな。だから気になって、自分で探したりとかする人もいますよね。だからそういうのも「見ないほうがいいよ」って言っても、「気になるから」とか。（遺族が）何年かぶりに服を買いに行ったのを、「何かチョロチョロ買い物してんじゃん」と書かれたりとか。何かそういう追っ掛けみたいなこと、… やる人はやるんで、しょうがないですよ。」(P4)